

明日からいよいよ学校が始まるので、机の周囲などを整理しようと思って、机の抽斗をあけて中のものを全部出した。すると中から小さな箱が出て来た。私は何が入っているのかしらと思いつながら、あけてみた。

中から出て来たのは一つの桜貝だった。私はその貝をみて去年の夏休みの事が思い出された。

この貝には、去年の夏休み一番淋しかった夕暮れの事がにじんでいる貝なのである。

それは夏休みも半分ぐらいすんだ時の事である。私は家にいるのも退屈だったので、一人で学校へオルガンを弾きに行った。しかしたった一人なので、少し悲しいような気がして来て又すぐ部屋にもどって来た。

だが誰もいない。静まりかえった部屋に、一人ぼつんと残されてしまった。

一人でいるせいか色々の事が頭にうかんでくる。そしてしまいには淋しくなって来て、故郷のことが思い出された。もうたまらない気持ちになって私は表に出た。

ぶらりぶらりと歩いているうちに、私は何時のまにか海岸に来ていた。

月見草が三つ四つ咲いている。夕焼けの空が海にうつって美しい。

こんな美しい景色の中を私一人が暗い気持ちでとぼとぼと歩いている。

すると石につまずいて私はころんでしまった。でも起きる気持ちもなくぼんやりとそこへ坐ってしまった。

そして私は何げなしに前を見た。少し離れた所に美しい色をした物が落ちていた。

そばによって良く見ると、それは一つの桜貝だった。淋しそうに砂の上に横たわっている。

私は手に拾い上げ、じっと見つめていたが、なぜか悲しくなって来て、涙がぼつりと砂の上に落ちた。

いつのまにかあたりは暗くなって月が出ている。

あの美しかった夕焼けのそらはどこにも見られなかった。

私は又そっと箱をあけて再びその桜貝を見た。桜貝はやっぱりあの時とかわらぬ色をしている。

そしてじっと私を見つめているようにして箱の中に入っている。

私はもとのようにふたをしてそっと抽斗に納めた。